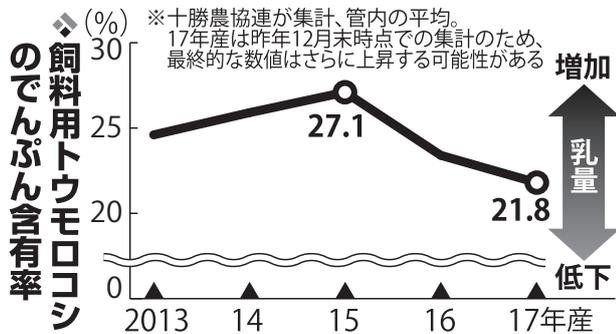


十勝管内で2017年に収穫した飼料用トウモロコシの栄養価（でんぷん含有率）が、平年より低めになっていることが十勝農協連の集計で分かった。昨年8月の気温が低く、実入りが悪くなったようだ。栄養価が少ないと乳牛の搾乳量減少につながる。集計結果は平均値で、実際の栄養価は収穫した地域によってばらつきがある。不足している場合には、輸入飼料などで適切に補う必要がある。



トウモロコシは乳牛の主要飼料。収穫後にサイロで発酵させ、給餌する。重要な栄養価がでんぷんだ。農協連は管内の農業関係者からサンプルを集め、飼料としてのできを分析した。

17年産のでんぷん含有率（水分を除く）は、昨年12月末時点の管内平均で21.8%にとどまった。まだ集計途中のため単純比較できないが、ここ数年で最高だった15年産（27.1%）と比べて5ポイント以上も低い。

農協連の栄養価分析は、早めに収穫したものから順次集計。遅く刈り取ったトウモロコシほど栄養価が高くなる傾向にある。

17年産の最終的なでんぷん含有率は現時点から上昇する可能性があるが、例年より低いのは間違いなさそうだ。

栄養価が低い主因は、昨年8月の低気温のようだ。帯広市内の平均気温は19.2度で、8年ぶりに20度を割り込んだ。結果的に、トウモロコシの実に栄養価が十分蓄えられなかった。

トウモロコシの収量は管内で平年並みを確保できているものの、でんぷんが少ないトウモロコシは乳牛が食べづらくなるという。栄養価が低く、かつ給餌量も減ると、乳量が少なくなる。雌牛の場合、繁殖能力にも悪影響が出かねない。

地域差も

17年産の栄養価を地域別にみると、19～26%とばらつきもある。各酪農家が、自前で栽培したトウモロコシの栄養価をしっかり把握する必要があるようだ。

もう一つの主要飼料である牧草は品質が良好だ。乳牛が消化しにくい繊維が、牧草にどれほど含まれているかを示す指標を見ると、過去5年で最も低い。消化が早いと給餌量が増え、生乳生産にプラスに働くとの期待がある。